

才能開花と夢の決断

中学生になった増田は、熊本市内のクラブチームに所属した。野球も軟式から硬式へと転向する。練習は毎週土日だけだったが、その二日間で一週間の練習メニューをこなしたという。

「小学生のころとは野球のレベルが全然違いました。特に走り込みを中心に、ほぼ毎日、10キロくらいは走っていました」と増田は話す。

夢への階段に隠された人知れぬ努力の裏づけ



↑今夏県大会で八代東投手陣をリードした増田。変化球主体に組み立て、打たせて捕るピッチングが持ち味。

こうした練習と努力の積み重ねで、投手に必要な足腰が強化され、強靱な下半身が形成されていた。

さらに増田は、中学校で陸上部に所属していた。ここでも才能を発揮させる。中学3年の県中体連の陸上中距離で400メートルに出場して、2位に輝いたのだ。

これを機に、陸上の強豪校から特待の誘いが浮上する。その数、5校。

しかし増田は、迷うことな

くすべての誘いを断った。

「野球をはじめたころから高校野球で甲子園に出ることが目標でした。そのために城山クラブ、リトルシニア、ボーイズリーグで野球を続けてきましたから」と増田はきっぱり答える。

15歳の心には甲子園という揺るぎない夢があった。

夢を追い求めた球児

高校は八代東へと進んだ。

「県内の高校で、ベスト8に安定して入るチーム。甲子園を狙うには十分なチームでした」と増田は志望動機を打ち明ける。

そして、甲子園を目指した3年間の高校生活がいよいよスタートする。

しかし、レギュラーになることは容易ではなかった。八代東野球部員は80人を超える。さらにここから背番号が与えられるのはわずか20人。もちろん試合に出られる保障はどこにもない。完全な実力社会が待っていた。

「甲子園を目指して練習姿勢も変わりました。何より自分を練習で追い込み、奮い

「結果が出せなかったのはチームとしてまとまりに欠けていたから。3年になったとき、自分たちが勝つためにチームとしてまとまろうと、仲間と心に誓いました」と増田は熱く語る。

増田自身も夏を勝ち抜くため、密かに投球フォームの改造を試みる。県大会がはじまる実に1か月前のことだった。

平成22年7月10日、最後の夏が開幕した。そこには八代東ナインの一人として、幼いころから甲子園を夢見る背番号「10」増田優貴投手がいた。すべてはこの夏のためにあった。8年間の野球人生をかけて、一球一球渾身の力で右腕をしならせ投げ抜いた。

そして、決勝のマウンドで野球人生を完全燃焼させた。

県大会が終わり、燃え尽きた増田は就職を考えたと。野球への未練を断ち切ろうとしていた。しかし、鬼塚博光監督やチームメイトなど周りから「野球を続ける」と励ましの声をかけられたと話す。

「野球で飯を食う夢に、もう一度挑戦してみようと思いました」と増田は、進学の道と夢の続きを決断していた。

子よりも親の成長一人前として認知

息子と夢を追いかけた父
増田 豊さん
(滝川・46歳)



息子が小学生のころ、友達とけんかばかりして、学校からの連絡、何度も相手の家へ謝りに行った記憶があります。それが野球をはじめたとたん、けんかがなくなりました。

息子が高校に入ってから、わたしには日課がありました。息子の泥だらけになった練習着の洗濯です。今は野球部を引退して洗濯をしなくて楽になった反面、どこか寂しさを感じています。息子と野球を通して、子どもよりも親の方が成長したのかもしれませんが。息子と一緒に親も夢を見ることができましたから。8年間野球を続けた息子へ「これからも頑張れ」といいたい。そして、もう一人の大人として認めてあげないといけませんね。

幼き日の少年が夢見た夏は終わった。
それは新たな夢へのスタートだった――

増田は野球人生をこう語る。

「いつも壁にぶつかっていました。壁にぶつかったとき、どう乗り越えられるかを野球から学びました。自分一人ではどうにもできないことも。周りからのアドバイス、いろんな話を聞いて、試しながら壁を乗り越えていく。その繰り返しです。野球は恋人。一生付き合っていきます」――



←「NEVER GIVE UP」と書き込まれた帽子。絶対にあきらめない。まさに増田の真骨頂と言え。



←増田が高校1年の時、母校御船中学校で講演した際の原稿。学生時代の時間配分、将来の夢の考え方などが5枚に渡り書きつづられている。